慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 田中真晴著 ロシア経済思想史の研究 : プレハーノフとロシア資本主義論史 |
| Sub Title | A study of Russian economic though : Plehanov and Russian capitalism, by Masaharu Tanaka |
| Author | 飯田, 鼎 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1968 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.5 (1968. 5) ,p.618(112)- 624(118) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19680501-0112 |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19680501-0112 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 書評

## 田中真晴著『ロシア経済思想史の研究――プレハーノフとロシア資本主義論史――』

飯田鼎

### 一

本書は、「ロシア・マルクス主義の父」と呼ばれるプレハーノフのロシア社会主義思想史上において占める地位の探求であると同時に、何よりもロシア資本主義論史におけるその理論的な役割を確定しようとして試みられた意欲的な労作である。「ロシア・マルクス主義」の先駆的地位、ロシアにおけるマルクス主義の理論および実践における開拓者としての役割が、同時に、ロシア資本主義にたいするマルクス主義の手法による分析の最初の著作の発表者であることによって、レーニンの先達者としての地位をしめるプレハーノフにかんするわが国最初の本格的な研究であるといえよう。著者の意図を探るならば、その「はしがき」で書いているように、「レーニン論とウェーバー論の双方から、あるいはその双方から、あるいはその双方に共通なデッド・ロックの自覚から、レーニン自体を歴史的・具体的にみる必要性を次第につよく感じるようになった」ということは、プレハーノフのレーニンとの対比における把握ではあっても、レーニンの絶対視を意図するものではないし、むしろ、レーニン研究のより一層の深化のためのプレハーノフ研究であり、およそ経済学史において問題にされることのなかったプレハーノフのロシア資本主義論を、ロシア資本主義論史の結節点として把えようとしているのだということができよう。

著者の意図におけるいまひとつの重要な問題は、「経済思想史」の理解についてであり、いわゆる経済学史が、経済理論の歴史的な展開の体系化であるならば、それは、「経済理論と歴史理論とを契機としてうちに含み、且つ実在への視線をもつような経済思想史」として、ロシア資本主義分析＝政治的・経済史的分析と不可分のものとしてとらえている点、たんなる「学史」あるいは「思想史」ではないことを強調している点も重要であり、これは、本書を一読すれば明らかなことである。以上は、本書を展開する上での著者の「方法論」ともいうべきものであるが、更に重要なものは、著者の問題意識ではなかろうか。「ロシア・マルクス主義論の展開を、その原点を中心として把握するというわたくしのテーマは、ロシアへマルクス主義が革命理論として導入され、定着していった過程を、プレハーノフにおいてとらえ、すすんではプレハーノフからのレーニンの独立、両者の対立の決定点を明らかにし、レーニンによるプレハーノフ批判のうちに、ロシアにおけるマルクス主義の本格的定着（ロシアマルクス主義の確立）をみること、プレハーノフをば、そうした歴史の相において把握することだけではなくて、プレハーノフにおいてマルクス主義理論そのものを考え、マルクス主義理論のもつ可能性をさぐることをもふくんでいる」（七頁、但し傍点は原文のまま）。この文章のなかで、「プレハーノフにおいてマルクス主義理論そのものを考え、マルクス主義理論のもつ可能性をさぐること」の意味は深長である。客観主義的なマルクス主義者としての立場から必然的に結果する強靱性と脆弱性、彼の敗北、マルクス主義からの逸脱を、レーニンとの対比において、たんなる「裏切り」として断定的に規定するのではなく、その理論の内部にひそむ示唆的なもの、たとえば修正主義論争と帝国主義論、階級と民族の問題等が、まさしく、現代のわれわれにとって重要な問題であり、とりわけ、今日のマルクス主義にとって死活の問題としてあらわれつつあるところのものの解明の手がかりを、著者は、その鋭敏な時代感覚をもってこの「プレハーノフ研究」においてひそかに意図しているとさえ感じられるのである。

### 二

本書には大きくわけて、三つの山、あるいは主題的な問題ともいうべきものを中心として論述されていると思われる。それはまず第一に、特殊ロシア的土壌へのマルクス主義の移入のための苦闘と、そこで当然直面せざるをえないナロードニキ思想との対決、非連続的二段階革命論の構想とそれを理論的に証明するための先駆的にして特異な資本主義分析。第二に、一八八〇年代以後におけるロシア資本主義の本格的な展開、労働運動＝社会主義運動を中心とする反体制的運動の展開の過程におけるプレハーノフにみられるマルクス主義の正統派的主導権の確立、それと同時に、思想と経済学における自由主義派、ナロードニキおよび合法マルクス主義にたいする批判と克服。そして最後に、ロシア資本主義分析および革命論＝組織論におけるプレハーノフのレーニンとの競合と対決そして敗北。著者は大体以上三つの重要な問題を中心として、マルクス主義者、革命思想家プレハーノフの全貌をあますところなくとらえようとする。

まず第一の問題について。一八七〇年代にはじまるナロードニキ主義は、ゲルツェンとチェルヌィシェフスキーを先駆として、土地共同体を基礎とするロシアに固有な、その意味で特異な社会発展の可能性を主張し、西欧資本主義にたいする批判者として現われるとともに、同時にそれはロシア資本主義化の告発者として登場したのであるが、著者は、その代表的な人物としていわゆる自由主義ナロードニキ（著者によれば、それは、革命的ナロードニキが一八六一年の改革を反人民的なものと考え、ツァーリズムの打倒によってのみ人民の解放すなわち共同体を基礎とするロシア社会の再生がありうるとして、「人民の中へ」をとなえ、実践活動に入っていったのに反し、一八六一年改革を肯定し、ツァーリズム体制の内部での改善を考え、合法的な評論活動にとどまり、非合法的な実践活動には入らないものであるが、この両者は、それほど厳密に区別されえない面がある）ミハイロフスキーの理論をとりあげ、それにたいする批判という形でプレハーノ

フのマルクス主義を対置することからはじめる。著者の視角は、この研究が「経済思想史」と名づけられていることからも明らかなように、ロシア的な社会革命思想としてのナロードニキ主義にたいしてマルクス主義的な革命思想家プレハーノフという形での単純な把握ではなく、その基柢として、ナロードニキ批判においても、あくまでもロシア資本主義の分析に重点がおかれ、この態度は本書を通じて一貫しているのが特徴的である。ナロードニキ思想とプレハーノフを結ぶ重要な環として、後進国ロシアにおける異常に早い「資本論」の翻訳の企図、一八七二年、ダニエリソンの訳書のペテルブルクにおける完成があり、一方において、この「資本論」の上に立ってプレハーノフのマルクス主義への出立が、ナロードニキのロシア資本主義論＝二つの道の可能性の思想と重なり合いながらも、本質的にはそれと異なるところの、ロシア資本主義の没落論の古典的著作、ヴォロンツォフの『ロシアにおける資本主義の運命』およびダニエリソンの『改革後のわが国の社会経済概要』にたいする批判は、他方において、ある程度、マルクスのロシア社会論批判に結びつくのである。

ヴォロンツォフとダニエリソンは、レーニンによってナロードニキの経済学者として一括され、一八八〇年代における「ロシア資本主義没落論」の代表者として特徴づけられたが、著者はしかし、両者の理論に共通するものよりもむしろ微妙なくいちがいを指摘する。すなわち前者は、ロシアの後進性からくる西欧資本主義にたいする決定的立ちおくれの結果として、資本主義ロシアの市場の面での絶対的不足によって、その没落は決定的に運命づけられているというのに対し、後者は、ロシア資本主義没落論というよりは、ロシア資本主義の実証的叙述によって、そのゆきづまりを農業生産力の停滞——すなわちロシアの穀物産出量は、七〇年代を通じてほぼ一定であるのに、商品に転化されて、生産者である農民から奪われていく穀物量の増大によって、農民の消費生活の悪化、農民経営の危機を深め、農業生産力の低下——を説明し、ロシア資本主義の暗い未来を予言するものとなっている。ロシア資本主義の将来の発展についての否定的な見解という点では両者は共通しつつも、ヴォロンツォフは、ロシア資本主義にたいする農民の経済的抵抗を強調することによって、政府に対し、ロシアの非資本主義化、つまり土地共同体を基礎とする改革、たとえば、農民銀行、クスターリ銀行、アルテリ、ゼムストヴォ倉庫等の創設にみられるように、農民のなかでも小ブルジョア的な分子に役立つ農民の日常的経済的要求を政府に提案し、ともかくも農民の生活に密着していて、ナロードニキ主義内部における現実派に属していたのであって、その決定的な弱点は、「農業における資本主義の失敗の論証にのみ急で、改革後のロシア農村における農奴制の残基という視点をもたない」（二二頁）ことであった。ヴォロンツォフの『ロシアにおける資本主義の運命』は、ロシア資本主義にかんする論争の発端となり、その意味ではまことに画期的な著作であるが、しかしその理論は、一八六一年の農奴解放以後のロシア資本主義の発展という事実によって裏切られることとなった。ヴォロンツォフが農民の日常的経済的利益にたいする密着にたいして、ダニエリソンは、マルクスの影響のもとに、ある一定の条件のもとでその理論は、マルクスによって評価された面はあるけれども、前者は、二つの道の可能性の思想をはっきりと否定して没落論を提起したのにたいし、後者は、二つの道の可能性の思想を否定するのではなく、それを没落論の方向にまげ、そのゆきづまりを結論することによってロシア資本主義の暗い運命を暗示する点では共通であるし、両者とも、もっぱら資本主義のみを問題として農奴制の残基が視角の外におかれている点に、著者は決定的な限界を認めている（二八頁）。

このような一八七〇年代のロシアに特徴的なナロードニキの二つの道の可能性の思想から出発して、プレハーノフはロシア資本主義発展論へ進み、やがて非連続的二段階革命論の定式化に至るのであるが、この場合、当然、彼は、ロシア革命についてのマルクス、エンゲルスの思想にたいする批判の仕事を行った上ではじめて、マルクス主義をロシア革命論に導入したのであった。第二章ロシア・マルクス主義の理論的成立、第三章プレハーノフの先駆的ロシア資本主義分析および第四章プレハーノフ研究入門の三つの章においては、プレハーノフのいわゆる非連続二段階革命論の構図について、克明な分析が試みられているのであるが、「ツァーリズムの打倒・ブルジョア革命（政治的自由の確立）→資本主義発展（ブルジョアジーの支配）の時期→社会主義革命→社会主義組織への移行」（五八頁）という革命のコースは、二つの革命の質的相違とそれを規定するところの資本主義的発展、ブルジョアジーの支配の時期の強調に特色があるのであるが、この革命路線の本質は、一方において、革命的ナロードニキとしての「人民の意志」派の革命理論と革命的行動、すなわちツァーリズム打倒（彼らは実際に、一八八三年三月一日、皇帝アレキサンドル二世を暗殺することによって、その意志を実現した）＝臨時政府の成立→憲法制定議会の召集とそれへの全権力移譲→社会主義への急速な移行であり、且つ「人民の意志」派の革命的実践のなかにおいて体験的にうち出してきたところの一段階革命論ないし連続的革命論から大きな刺戟を与えられながらも、これを批判し克服する形で提出されたものであると同時に、一方において、はじめはプレハーノフの非連続的二段階革命論から出発しながらも、やがて労農同盟を主軸として展開するレーニンの革命論にたいしても反対するところのものであったことはまことに興味深い。問題は、「人民の意志」派およびレーニンの革命理論との相違を根本的に規制するものは、ロシア資本主義の発展およびロシア・ブルジョアジーにたいするプレハーノフ独特の理解と把握によることであり、前者にたいして、プレハーノフの資本主義発展の把握、社会変革におけるブルジョアジーの果す積極的な役割の重視、ブルジョアジーの権力掌握のプロレタリア革命にたいする先行性という理解は、決定的に優越するものであり、またここにこそ、プレハーノフをして、ロシア・マルクス主義の先駆者としての意義が存在するが、同時に、ブルジョアジーの役割を古典的ブルジョア革命におけると同次元での帝国主義段階におけるプロレタリア革命の把握という点で、レーニンと決定的に背反するものであった。しかも彼の革命論は、

たんにそれが戦術論としてあらわれたのでなく、先駆的なロシア資本主義分析としての『われわれの意見の相違』によって、追求されたところに、その先進性と悲劇性が存在したといえよう。

著者は、プレハーノフの非連続的二段階革命論の形成とロシア革命運動への定着化を、ロシア資本主義論史の第二段階ともいうべき一八八〇年代における「二つの道の可能性の思想」の没落とこれに代る「資本主義没落論」の抬頭にたいする「ロシア資本主義発展論」による批判、これにつづく九〇年代の論争の拡大、そして事実上の資本主義の発展によって確証された後者の勝利、その定説化において見出しており、第五章および第六章は、そうしたロシア資本主義の発展にともなう西欧の経済学および社会経済思想の後進国ロシアへの移入の過程でひきおこされるに当って触発されるさまざまな問題についてふれているのであるが、とくにマルクスおよびエンゲルスを除けば、プレハーノフにもっとも強い影響を与えたナロードニキのロシア資本主義論の代表作としてのダニエリソンの『改革後のわが国の社会経済概要』、合法マルクス主義者としてのストルーヴェの『ロシアの経済的発展の問題にたいする批判的覚え書』、『過去および現在におけるロシアの工場』について、きわめて詳細な批判的紹介を行っている。そして、在来の経済思想にたいして西ヨーロッパの経済学の移入によってひきおこされる衝撃について、著者がのべているつぎの言葉はまことに感銘深いものがあろう。

「一般に後進国においては、その国自体の基礎過程の発展の程度に比べて反資本主義思想が不均等的な早熟さを示す傾向がある。その理由として考えられることは、第一には、先進国における資本主義の現実の諸矛盾がすでに知られているために、人間解放の場としての市民社会のイメージが成立しにくく、その限界性がはじめからつよく意識にのぼること、第二には、後進国は先進資本主義国ないし世界資本主義のつよい側圧をうけて資本主義化の強行を、しかも資本主義の現代的水準への近迫を要求せられるために、前資本主義的社会構造の残基が清算されないうえに資本主義の継起的諸段階が重畳し、諸矛盾が集積することである。そのような諸矛盾の集積の場所は、現実に対する総体的・根源的な批判思想の醞醸する場所となりうる。と同時に、後進国であればあるほど、資本主義批判が資本主義のそとがわからだけの超絶的批判になり、ロマン主義的あるいは観念論的な性格を強めてゆく。マルクスがドイツから出立したこと、しかしまたドイツのそとへ出てフランス、イギリスに移って自己の思想を成熟させたことは含蓄のふかい事実である」（二一九頁）。

プレハーノフの非連続的二段階革命論を中核とするマルクス主義は、あたかも、ベルンシュタインにたいする正統派マルクス主義者としてのカウツキーと相似性をもっており、それと同時に、プレハーノフのレーニンにたいする関係は、カウツキーのレーニンにたいする関係と密接な関係がある。それはあたかも、レーニンがプレハーノフから出て、ついにこれを超えるところのものであったと同様に、第二インターナショナルの理論的指導者としてのカウツキーにたいするはげしい非難は、そのままプレハーノフにたいしてもむけられなければならなかったのである。しかし著者のプレハーノフにたいする評価は、たんにレーニンと対置して、断定的に「裏切り者」として規定することではない。むしろ非連続的二段階革命論に徹底してゆるがなかったプレハーノフの理論は、レーニンのロシア革命における偉大さにもかかわらず、その後の社会主義革命において解決されるべき大きな問題を残したというのである。

以上、四〇〇ページをこえる本書のもつさまざまな問題のごくあらましを指摘したが、決して十分というわけではない。本書は、実にさまざまな問題について考えさせずにはおかない。きわめて魅力ある平明な文章によって、ロシア社会経済思想の世界に読者は導かれる。そして高度な専門書であると同時に、初学者にたいしても十分な配慮がなされていて、文章のなかに著者の人間味を感じさせるものがある。しかし何よりもレーニンの正しい理解のために欠くべからざる研究というべきである。わが国にはじめてあらわれた本格的なロシア経済思想史の研究として、ロシア思想史のみならず、広く思想史に関心をもつ者が必読するに値するであろう。

だが筆者の読後感としては、本書もやはり、論文集としての性格を完全に脱却しておらず、重複がやや目立っているといえよう。尤もそれがかえって初学者には便利であろうが。しかし筆者は、レーニンを媒介にして、カウツキーとプレハーノフとの相似性を断片的ではなくもっと深く追求してもらいたかったと思う。ロシア経済思想史について全くの門外漢の筆者が、この大著について蕪雑な紹介の筆をとらせていただいたのは、ひとつは著者にたいする尊敬の念といまひとつは、いずれは、ベルンシュタイン→カウツキー→ローザ→レーニンを系譜とするドイツ社会民主主義理論史の研究に立ち向おうとする筆者のひそかな意図からである。読みの浅いことはもちろん、誤解や思いちがいがなかったかをおそれ、著者にご寛恕をお願い致すものである。専門家でもないわたくしは、最初から、本書を批判しようなどとは考えずに、ひたすら、本書の内容を理解しようと努力した。そのために紹介に終ってしまった点、まことに不出来で申訳ないが、読者はその点を諒とされたい。なお、本書の主要目次をつぎに掲げておこう。


はしがき

前　篇

第一章　一九世紀ロシア資本主義論史の研究序説

第二章　ロシア・マルクス主義の理論的成立

第三章　プレハーノフの先駆的ロシア資本主義分析

中　篇

第四章　プレハーノフ研究入門

第五章　一八八〇年代から一八九〇年代へ

第六章　一八九〇年代ロシアの経済思想の動向

第七章　一八九〇年代論争における思想と経済学

第八章　一八九〇年代のロシア資本主義の類型

第九章　プレハーノフの経済思想

補論Ⅰ　レーニンの市場理論について

補論Ⅱ　ロシア資本主義論の展開

（ミネルヴァ書房・一九六七年八月刊・A5・四六四＋二六頁・二五〇〇円）

――一九六八・三・一四・深更――

犬塚昭治著

# 『日本における農民分解の機構』

高山隆三

## 一

本書を書く動機を著者ははしがきで次のように述べている。「もとより日本農業は重大な変化をうけながらも戦前戦後をつうじて日本資本主義の重要なる一構成部分をなしている。戦後の日本農業を科学的に分析するためには、戦前のそれをどう理解するかが前提とされなければならない。このことが一九二〇年代の農民層分解を分析対象とする本論文をかいた動機の第一のものである。第二のそれは、中農標準化傾向とよばれる事実と、結局においてそれを規定する帝国主義段階とを媒介する論理をさがそうとする点にあった。」「第三の動機は、その媒介環として農産物価格水準の分析をえらぶことができるのではないか、そして、それをとおして農民分解の機構が基本的に明らかにされうるのではないか、と思った点」「さいごに第四の動機はこの論文をつうじて、日本における古典的帝国主義段階の農民分解の機構を解明したかった点にある。」

このような動機を以て著わされた本書は次のごとく構成されている。

はしがき
序章　農民層の分解形態
第一節　課題
第二節　分解形態
第三節　方法
第一章　農業労働力の価格構造
第一節　農産物価格の変動と需給関係
第二節　農業労働力の価格水準
第三節　農業雇用労働力の価格水準
第二章　価格構造の規定要因
第一節　農業生産物構成
第二節　農業生産諸力の階層性
第三節　価格構造の論理
第三章　価格構造の展開形態
第一節　賃労働兼業化の構造
第二節　農民労働力の再生産構造
第三節　土地所有者化の構造
むすび　二〇年代農民分解の歴史的意義

この構成は著者の動機の展開・論理を示すものにほかならない。

以下この構成にそって著者の論理を先ず明らかにしてみたい。

序章において、著者は、石渡貞雄氏「農民分解論」、綿谷赳夫氏「資本主義の発展と農民の階層分化」（東畑精一・宇野弘蔵編『日本資本主義と農業』所収）、栗原白寿氏「日本農業の基礎構造」「現代日本農業論」を検討して次のようにいう。「農民分解論の課題はいまや明らかである。それは農民層が上向するか下向するか、いいかえれば両極分解するかどうか、を明らかにすることではけっしてない。そうした分解論の原理論はすでに解明されているものとしていい。問題は上向の形態、下向の形態にあるのであって、そうした分解形態の分析とその根拠の解明こそ分解論の課題でなければならない。」（三〇頁）として、一九二〇年代の分解形態が分析され、この時期の分解が、「農家諸階層がそれぞれ上下に分解しており」「農民層のブルジョワ化・プロレタリア化がともに農業生産外に出るという形でおこなわれることをいみしている。」（四二頁）その場合、農村におけるブルジョワ化の主流は「土地所有者化」であり、それは「農業経営の資本家的発展が消えたために、まえからあった土地所有化が前面にあらわれた、ということを基本的にいみ」（四三頁）し、農民のプロレタリア化の特質は「半プロレタリア化として固定的になってしまう」（六六頁）ことであると規定されている。各階層の分解運動の結果として増加する一～二町層農民は「自己の農業経営を維持するものとしての農民と、自作地の地代部分を取得するものとしての土地所有者と、さいごに非恒常的賃労働兼業にでるものとしての賃労働者との三つのたがいに異なる性格を同時に、したがって不完全に具有する、いわば三位一体の存在となる。」（六七頁）かかる分解形態を規定するものはなにかを著者は「地代をふくまざる限界農産物の価格水準、農業雇用労賃水準、および農業労働生産力水準」の三要因に求め、相互に有機的連関のもとにある三要因のうち基本的要因として農産物の価格水準とし、「小農制のもとでの農産物価格の水準とは結局、その農産物価格のうちに実現される農業労働力の価格水準をいみするもの」（七一頁）とし、これを基軸として第一章以下の分析がすすめられるのである。

## 二

第一章第一節では、自家農業労働に従事する農民労働力の価格の社会的水準との対比、位置づけ、その関係の変化、自小作別および経営規模別階層差と価格水準格差とその変化を「農家経済調査報告」、帝国農会刊の「自大正十三年至昭和八年農業経営調査概要」を基本資料として検討されている。先ず、一九二〇年代と三〇年代初頭における米価、農家購入品価格、その他農産物価格の変動関係および農産物需給関係より、価格低下を規定する総需要量は決して減少しているわけではなく、「この時代に特有の過剰人口の新たなる堆積が農業内部にまで波及することによって、価格低落にさいしても農業生産を容易に減少せしめず、供給総量がしばしば現実的にも需要量をオウヴァすることになる」（九三頁）ということが指摘され、長期価格低落を基本的にささえるのが「農業内部の過剰人口、すなわち農産物価格のうちに実現される農業労働力の価格水準」